

日本新聞製作技術懇話会
広報委員会編集

編集人 手打 省一
東京都千代田区内幸町
日本プレスセンタービル

8階 (〒100-0011)

電話 (03) 3503-3829

FAX (03) 3503-3828

<http://www.conpt.jp>

CONPT

CONFERENCE FOR NEWSPAPER
PRODUCTION TECHNIQUE JAPAN

VOL.43 No.3

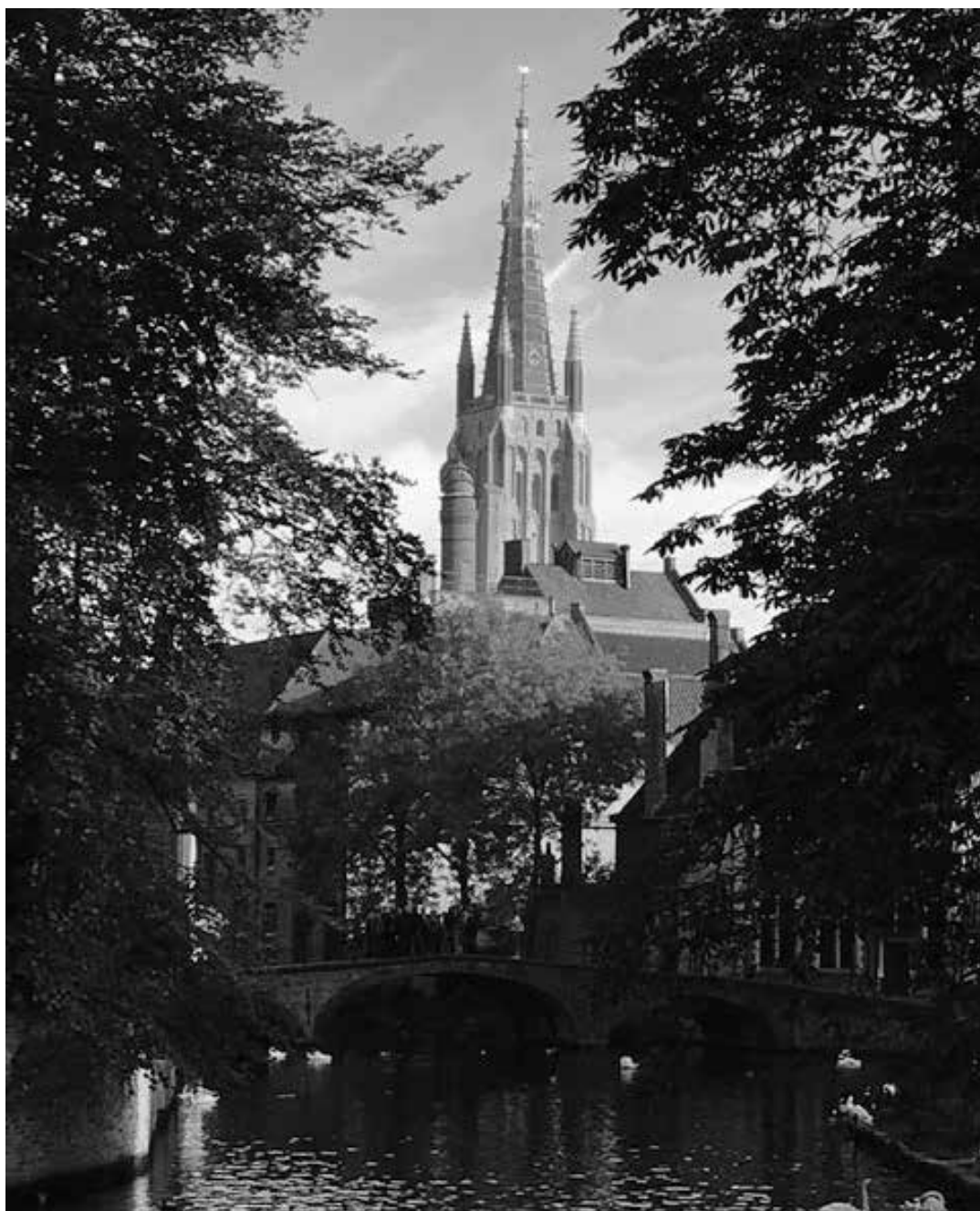
2019.5.1

(通巻 255 号)

日本新聞製作技術懇話会

会 報 (隔月刊)

(禁転載)



目次

JANPS2018 技術開発奨励賞を受賞して	日本電気(株)	3
	富士通(株)	4
	(株) JX 通信社	5
	(株) Spectee	6
JANPS2018 技術開発奨励賞「特別賞」を受賞して		
	コダック ジャパン	7
	日本アグファ・ゲバルト(株)	7
	富士フイルムグローバルグラフィックシステムズ(株)	8
	三菱製紙(株)	9
フンケラー・イノベーションデイズ 2019 からの報告		
	(有)メディアテクノス 代表取締役 井上 秋男	10
わが職場あれこれ	愛媛新聞社 執行役員メディア推進局長 古田恵一郎	13
第123回技術懇談会 福島民報印刷センターを見学		13
美味あっちこっち		
	コダック (同) プリントシステム営業本部報道メディア統括部 担当部長 久米 邦雄	14
第9回CONPT技術研究会		15
技術対話の活動報告・意見交換会		16
会員消息、CONPT日誌		16

●表紙写真提供：CONPT-TOUR2018 入選作より FFGS 下平 泰生氏 「運河の旅」

●表紙製版：(株)デイリースポーツ

●組版・印刷：(株)デイリースポーツ

JANPS2018 技術開発奨励賞を受賞して

日本電気(株)

人物検索ソリューション NeoFace Image data mining

この度、JANPS2018に出展した人物検索ソリューション「NeoFace Image data mining」(以下、IDM)につきまして、技術開発奨励賞をいただき大変光栄に思います。ご選考いただきました技術委員会をはじめとした関係各位に改めて御礼を申し上げます。

IDMは、大量の画像から顔照合で同一人物を高速に探し出すことができるソリューションで、顔認証エンジンと時空間データ横断プロファイリング技術から構成されています。

■世界No.1の顔認証「NeoFace」

まず、NECが持つ世界No.1の認証精度を誇る顔認証エンジン「NeoFace」。最先端AI技術群「NEC the WISE」を代表する顔認証技術です。人々が複雑に行き交うような悪環境であっても圧倒的に低いエラー率を誇り、米国立標準技術研究所(NIST)による顔認証技術のベンチマークテストにおいて、他社を大きく引き離す第1位の評価を4回連続で獲得しました。(図1)

■木構造で大量のデータも高速検索が可能

次に、NEC独自の「時空間データ横断プロファイリング技術」は、大量のデータを類似するグループごとに分け類似度に応じて木構

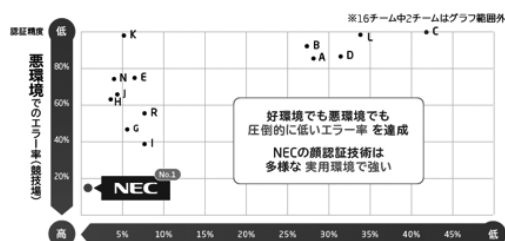


図1.顔認証精度はNISTの評価で世界No.1

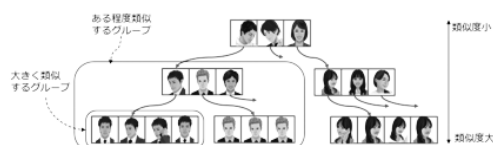


図2.大量の顔情報の類似度を用いて木構造で管理

造で管理することにより、人物を高速に分類・検索する技術です。(図2)

■アーカイブ資産の有効活用を支援

IDMを活用することで、新聞社のもつ大量のアーカイブから静止画／動画を問わず高速に高精度に同一人物を検索することができます。例えば、アーカイブ登録時に人物名を自動抽出したり、書誌情報のない過去の写真に自動で人物名のタグを付与したり、名前が分からない人の顔写真でも同一人物を探し出せたり、大勢の人が写った集合写真でも特定の人物を一瞬で見つけられたり、有名になる前の著名人が偶然映り込んでいた貴重な写真を発掘できたり等々、今まで眠っていた資産に新たな価値を付加し有効活用することが可能だと考えます。

NECは、お客様やパートナーとの「共創」

日本新聞協会技術委員会は3月8日、新聞製作技術展(JANPS2018: 昨年11月開催)に出展した51社・団体のなかから、4社に技術開発奨励賞を贈ることを決めた。また、次世代CTPプレートを開発した4社が同・特別賞を受賞した。受賞した各社に新技術の紹介をお願いしました。

により、新たなビジネスモデルの創出に積極的に取り組み、ICT（情報通信技術）の力を最大限に活用した社会価値の創造を目指しています。IDMをはじめとした様々な最先端技術を取り入れたソリューションをご提供することで、新聞社の「業務効率化」と「ビジネス拡大」を実現し、お客様とともに新聞業界

の発展と活性化に向けて邁進（まいしん）して参りますので、引き続きご指導ご鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。



↑お問い合わせ等はコチラからお願いします。

富士通(株)

Deep Learningによる生成型要約—

この度は、当社がJANPS2018に出展いたしました「Deep Learningによる生成型要約」を栄えある「技術開発奨励賞」に選考いただき、誠にありがとうございます。選考いただきました関係者様、今回の開発のために学習データをご提供いただきました信濃毎日新聞社様、毎日新聞社様に心より御礼申し上げます。

当社は1980年代より継続的にAIの実用化に向けた研究開発に取り組んでまいりました。

Deep Learning技術の登場をきっかけに第三次AIブームが到来し、これまでのAI技術では難しかったことが高い精度で実現できる時代になり、新聞制作やメディア配信業務の効率化の実現に向けた、AI技術の研究に着手しました。

今回のJANPSでは、ニュースサイト見出し、新幹線車内電光ニュース、デジタルサイネージ向け要約の実現に向けた14文字、54文字、80文字要約のプロトタイプを展示いたしました。

Deep Learningや機械学習については、現在ではTensorFlow（Google）や、Chainer（Preferred Networks）といったオープンソースフレームワークが充実し、情報系の学生の方でも利用可能な技術となってきました。

しかし、精度の高い結果を導き出すためには学習モデルの生成が重要なポイントであ



図1. Deep Learningを活用した記事要約
8万件の記事による学習モデルを使用し、14文字、54文字、80文字要約を生成



図2. Deep Learningを活用した見出し生成
100万件の記事による学習モデルを使用し、複数の見出しの候補を生成

り、学習モデルの生成に際してのデータクレンジングやカテゴライズの工夫が、新聞社様の業務システムに長年携わってきた当社の強みであると捉えております。

今回「技術開発奨励賞」に選考いただきましたプロトタイプにつきましては、お客様へのご提供に向けて現在も研究を継続中です。

当社といたしましては、お客様の業務の効

率化・省力化に寄与できるよう、1日も早い製品化に向けて引き続き取り組む所存でございます。

今後ともご指導ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

(株)JX通信社

SNS 緊急情報サービス FASTALERT —

この度、弊社のSNS緊急情報サービス「FASTALERT」を技術開発奨励賞に選定いただきましたことを大変光栄に存じます。ご選考いただきました技術委員会の皆様と全ての関係者様に御礼申し上げます。

私どもJX通信社は、報道産業の「コスト構造」への強い課題意識から生まれた、報道ベンチャーです。

労働集約的な産業構造に起因するコスト構造の課題を解決するには、テクノロジーによる機械化・自動化において他に手はありません。

こうした考えから「FASTALERT」に限らず、ニュース速報アプリ「NewsDigest」や選挙報道のための自動電話情勢調査など、全ての製品を機械化・自動化による「ビジネスとジャーナリズムの両立」を実現するというビジョンに沿って開発しています。

創業者である米重克洋は、ジャーナリストはおろか報道業界の経験もない、単にニュースが(特別に)好きな一読者という立場から、学生時代の2008年に起業しました。様々な角度から報道のコスト構造の課題を考え続けて「機械化・自動化」を軸に切り込み始めたのが2011年ころでした。

折しも、東日本大震災を機に、SNSが新た



SNSからAIが自動で災害・事件・事故などの緊急情報を収集し、スピーディーに配信する「FASTALERT」

なニュースの「現場」になりました。世はまさに「1億総カメラマン」の様相で、SNSにまずニュースの第一報が上がる状況になったのです。しかし、報道現場ではSNS取材を効率的に行う方法がなかなか見いだされず、人海戦術で監視、検索するといった取り組みが長く中心でした。

報道産業全体が収益の課題に直面している現状では「現場」としてSNSも重要だからといって、それを人海戦術で開拓するのは現実的ではありません。そこで、それ以前に編集作業自動化の取り組みなどを通じて培ってきた、自然言語処理などのテクノロジーが活かせないかと考えました。そして2016年9月、共同通信様などごく一部に試験提供を開始したFASTALERTは大変好評を呼び、そこからわずか半年でNHK様と全ての民放キー局に普及しました。その後は瞬く間に全国の新聞社の報道現場でもご活用いただいています。

報道の産業史的に見れば、「通信社」はコスト課題を解決するための「共助」の組織です。また、最新のテクノロジーの担い手でもありました。古くはロイターが「電信」という当時の最新テクノロジーを用いて速報革命を実現

しました。業界全体が社の垣根を超えてその革命に「参加」し、社会からの信頼を獲得したわけです。このように、通信社はテクノロジーと共助によって、報道業界・産業全体の様々な課題解決を牽引してきたと言っても過言ではありません。

私どもJX通信社自身も、そうした「共助」を実現するプラットフォームとして、新しい通信社像を目指していきます。「FASTALERT」は、ほんの始まりに過ぎません。テクノロジーが報道産業の明るい未来にもたらすインパクトは、もっと大きく、もっと本質的なものであるべきです。SNSという新しい現場にどう向き合うのかという課題

は、FASTALERTの改善と進化によってより上手に解決しつつ、他のさらに大きなコスト構造の課題の克服にも取り組みたいと考えています。ご一緒に「こんな課題を解決できないか」というアイデアがあれば、ぜひ私どもにお寄せください。

今、確かに、報道産業は厳しい状況に直面しています。しかし、AIやSNS、スマートフォン、5Gといった新しいテクノロジーやトレンドも生まれています。ここには必ず、報道産業にとってのチャンスもあります。テクノロジーと共助をキーワードに、令和の時代にあるべき新しい報道の姿を追求していければと考えています。

(株)Spectee

AIを活用して速報配信
Spectee（スペクティ）

報道機関向けに、AIを活用して、SNSに日々投稿される情報の中から緊急性及びニュース性の高い情報を速報配信する「Spectee（スペクティ）」は、現在220社を超える報道機関や民間企業、公共機関に採用されています。

このスペクティは2011年の東日本大震災を教訓に開発が始まりました。当時、テレビや新聞等のメディアからでは、いま現地がどうなっているのか、なかなか伝わってきませんでした。一方で、ツイッターなどのSNSには、まさにいまその瞬間に現場にいる人たちの映像や写真、コメントが多数投稿され、現場のリアルタイムな状況を最も映し出していました。この情報をうまく整理して、多くの人に伝えるメディアは作れないか。スペクティの開発はその体験を原点にスタートしました。2015年の報道向けサービス発表後、多くの報道機関に採用いただき、今ではAP通信をは



Spectee

じめ海外のメディアでも採用されるまでになり、報道には欠かせないサービスの1つとなっています。

今回の「技術開発奨励賞」の受賞は新聞業界から高い評価をいただいたということとともに、更なる質の高い技術の開発やサービスの提供への期待の表れと捉えています。今後も業界の発展により貢献できるように、一層の技術開発に努めてまいります。

JANPS2018 技術開発奨励賞「特別賞」を受賞して

次世代 CTP プレートの開発—

コダック ジャパン

この度、JANPS2018におきまして、栄えある「技術開発奨励賞・特別賞」に、弊社のKODAK SONORA NXを選定いただき大変光栄に存じます。1995年に、コダックが世界で初めて開発したサーマルCTPシステムは、印刷業界に大きな技術革新をもたらし、今日のサーマルCTP技術の礎を確立しました。2012年には、商業印刷分野向けの完全無処理CTPプレートKODAK SONORAを販売開始し、現在、日本の47全都道府県の500社に迫るお客様に導入されています。SONORA NXは、豊富な導入実績をベースに、日本の新聞市場で求められる高耐刷性、高精細印刷、合紙レス等のニーズに対応するため、反応効率が高い強靱な新開発の感光層を採用して開発された製品です。自動現像機や処理薬品が一切不要の完全無処理CTPプレートとして、多くの新聞社様でご採用いただいております。「SONORA NX」は、以下のような優れ

た特長を備えています。

■耐刷性能

- ◆自動現像機や処理薬品を一切必要としない環境対応製品
- ◆各社のプレートセッターで使用可能
- ◆合紙レスにも対応
- ◆視認性が高く、版の識別が容易
- ◆耐刷性に優れ、ハンドリングは現像タイプのプレートと同等

■印刷性能

- ◆機上現像を感じさない、早い整面性で印刷の生産性に貢献
- ◆水幅が広く、水量の調整が容易
- ◆耐薬品性に強く、幅広いエッチ液やプレートクリーナー等の印刷薬品に対応
- ◆15万impressionの高い耐刷性
- ◆FMスクリーニングのKODAK STACCATO対応

コダック ジャパンでは、今後も引き続きさらなる製品の改良、改善を行い新聞業界の皆様へのニーズにお応えして参りたいと考えていますので何卒よろしくお願い致します。

日本アグファ・ゲバルト(株)

この度、JANPS2018への出展における弊社CTPプレートに対し、大変に栄誉ある技術開発奨励賞「特別賞」を頂戴することとなり、光栄に存じます。ご選定いただきました委員会、ならびに関係者の皆様に、心より感謝を申し上げます。

アグファ・ゲバルト株式会社は、152年の歴史を持つベルギーに本社を置く会社です。152年前、日本は慶応3年、大政奉還の年に誕



生したわけですが、近代化の波に揺られながらも、世界中の印刷市場に向けグローバルな視点からユニークな製品を創出してきました

た。

日本の新聞製作技術は独自の進化を遂げ、専用技術に支えられてきました。そこに対し弊社は、グローバルに展開してきた製品技術のご提供を行うことで、新聞社の皆様に多様な形で貢献したいと考えてきました。

このことが、CTPプレート技術のさらなる発展に繋がっているものと思っております。

弊社のCTPプレートAzuraシリーズは、「商業印刷でも使われている」「海外でも使われている」「網点品質にブレが少ない」といった特徴がございます。専用のガム洗浄装置で非画線部を除去するためバンダーに入る前に視

認性も確保されます。

そして、何よりも採用コストメリットのご提供が可能となります。

平成を振り返った時、インターネット通信技術の劇的な変革により、ネットワーク越しの端末の進化と共に、情報が溢れ多様な選択肢が手軽に得られるようになりました。

令和では、高速通信「5G」の時代を迎えます。人々は、今以上に満ち溢れた情報に触れることと思います。弊社は、変化する情報社会の中で、紙の媒体にしかできない新聞製作への貢献を常に考え、お客様のニーズと共に、さらなる進化を遂げていきたいと考えております。

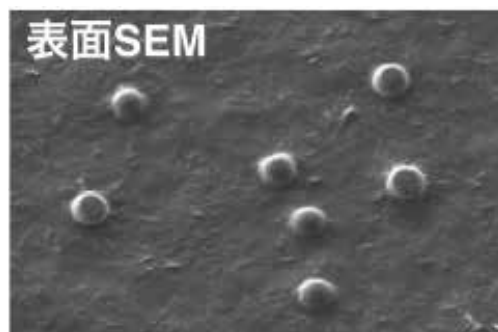
これからも宜しくお願い申し上げます。

富士フイルムグローバル グラフィックシステムズ(株)

JANPS2018に弊社が出展しました新聞用合紙レス完全無処理CTPプレート「ZN-Ⅱ」に対しまして、このたび技術開発発展賞『特別賞』を頂戴しましたこと、厚く御礼申し上げます。また、本プレートの開発には、読売新聞社様、中日新聞社様、静岡新聞社様を始めとする全国の新聞社様のご協力により商品として発表することができ、心より感謝申し上げます。

この「ZN-Ⅱ」は、JANPS2015で発表・発売を開始した新聞用完全無処理CTPプレート「ZN」の市場導入を通じて、新聞印刷に携わる現場の皆様の要望として上がってまいりました、合紙レス、エッジ端部までの描画性、エッジ汚れ性向上の3つの課題に対して研究を重ね商品として発売することができました。

本プレートには、「ZN」で採用したHDN技術(超高次元ネットワーキング技術)により、感光層の結合を強固にしました。さらに支持



体の砂目部には、MGZ技術(マルチグレインZ技術)により、感光層の密着と保水性を確保し汚れに強い砂目を形成しており、新聞印刷に必要な耐刷と汚れ性を確保しました。

「ZN-Ⅱ」には、前述した3つの課題に対して、2つの技術を投入することで課題解決を図りました。

1.合紙レス化

従来の新聞用無処理 CTP プレートでは、輸送・積み替え時のキズ発生や、セッター給版時の多重給版を防止する目的で、プレート間に合紙を挿入していましたが、さらなる環境負荷低減のため、新たにプレート裏面にマ

ット剤を敷設する「MBW (Mattness Backside Wrapping Technology) 技術」を採用することで、合紙を不要にしました(前頁写真)。本技術を採用することで、一部の新聞社様でご指摘のある版ズレへの効果も確認されています。

2. エッジ汚れ防止効果とエッジ描画性の両立

プレートのエッジ部に付着したインキが紙に転写してしまうという、新聞印刷に特有の「エッジ汚れ」を防止するため、従来の新聞用無処理 CTP プレートではエッジ部に親水化処理を行なっていました。そのため、エッジ

部において描画できない領域が生じていました。そこで、エッジ汚れの防止とエッジ部での画像形成を両立するため、感光層全体に親水化剤を含ませ、機上現像によってエッジ部へ親水化剤を移動する「DDS (Drag Delivery System Technology) 技術」を採用することで、エッジ汚れ防止効果とエッジ描画性の両立を達成しました。

今後も今回の受賞を励みに引き続き、新聞業界に貢献できるよう、ささやかながら弊社としても一層の努力を重ねていく所存です。

これからもよろしくお願い申し上げます。

三菱製紙株

この度は、JANPS2018におきまして、弊社の「次世代CTPプレートの開発」に関しまして、栄えある技術開発奨励賞・特別賞を頂戴し大変光栄に存じます。選定賜りました委員会ははじめご関係各位に深く御礼申し上げます。

今回出展しました『PD-News RECTA』は、アルカリ現像やガム処理などが一切不要で、CTPセッターでの露光完了後、そのまま印刷機にかけられるため、処理に関わる機器や薬品、電気代などが不要となり、お客様の省資源化に大きく貢献するものと自負しております。また、自動現像機が不要になることで、CTPの現場では、大幅な省スペース化が図れるほか、オペレーターは現像液・ガム液の液管理、自動現像機のタンク・ローラー・側板の洗浄、予備の薬品・ローラーの在庫管理などから開放され、作業時間の大幅な短縮が可能。現像液・ガムの廃液や、自動現像機の洗浄水がなくなることで、廃液・廃水量も削減できます。

『PD-News RECTA』の主な性能としまし

て、プレートの感度は、100～140mj、最新のCTP装置で160版／時の生産性を有しています。また、印刷性につきましては、多くのお客様からご指示を頂いております有処理版PD-NewsVer5の性能を引き継ぎ、安定した印刷性能、高耐刷性(10万インプレッション以上)を有し、また、高線数へも対応しており、安心してご使用いただけます。

しかしながら、エッジ汚れ対策として、プレートのエッジ部に親水化剤を塗布しており、はみ出し広告、スポーツ紙のはみ出し記事、パノラマ印刷などの使用に制約があります。

また、合い紙も必要であり、この点につきましてはできるだけ早くお客様へご提供できるように開発に取り組んでまいります。

昨今、多くの新聞社様で、紙面品質向上や効率化とともに、省資源・省エネ・省スペース化が重要な課題になっており、CTPの無処理化の流れはさらに加速するものと思われます。

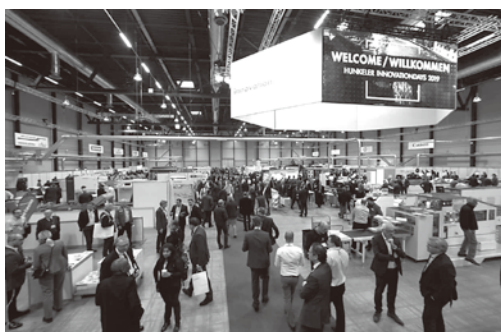
三菱製紙では今後も、市場のご要望を最大限に採り入れながら版材およびシステムの開発に取り組み、新聞・印刷業界の発展に貢献して参る所存です。

フンケラー・イノベーションデイズ2019からの報告

有限会社メディアテクノス代表取締役 井上 秋男(JAGAT客員研究員)

世界最大のデジタル印刷ソリューション展「Hunkeler Innovationdays 2019」(以下 HID 2019)は2月25日～28日の4日間、スイスのメッセ ルツェルンで開催された。主催者である後加工機大手のHunkelerは「success with automation」(自動化で成功)をテーマに掲げ、わが国ははじめ欧米のデジタル印刷関連のリーディングサプライヤーとともに、最新機器の展示や画期的な技術を出展し、オフセット印刷に迫る多彩なライブデモを繰り広げた。

来年6月中旬には世界最大の国際印刷・メディア産業展drupa2020が開かれる。HID2019はその前哨戦として位置付けられ、主催者はじめベンダーの熱意、意気込みが感じられた。その概要を報告する。



テーマは「success with automation」

【開催の概要】

HIDは1994年の第1回から2年おきに開かれ、今回は13回目となる。デジタル印刷の普及拡大とともに出展社、来場者数は増加し、当初の「プライベート展」から「総合デジタル印刷ソリューション展」に進化発展している。

出展社はHunkelerはじめインクジェット(IJ)やトナーデジタル印刷機、後加工機、ワークフローソリューション、用紙、乾燥機、

RIP、アプリソフトベンダーなど100社(前回90社)を数え、最新機器の展示と「トランザクション(通知物)、ブック、商業印刷、ダイレクトメール」など約40のライブデモを行った。

来場者は世界100の国と地域(同50)から約6500人(同6000人)にのぼり、わが国からは視察ツアーも企画され、印刷関係者など約200名(同120名)が訪れた。

今回のHIDは2021年2月21日～25日に同所で開催される。

【全体の動向】

■「自動化」による次世代デジタル印刷の方向性を示す

印刷の小ロット化や多様化に対応して、HID2019では「自動化による成功」をモットーに、印刷データの入稿から印刷、後加工まで一貫して自動化、省力化を図る「ホワイトペーパーIN、完成品OUT」によるEnd to Endのソリューションを実演した。これによりデジタル印刷の課題のひとつになっていたROI(投資利益率)が大幅に改善され、データプリント、トランザクション、DM印刷からブック、商業印刷まで、幅広い分野に向け取り組みが拡大する次世代デジタル印刷の方向性を示した。

■デジタル印刷機が進化発展

▼連帳IJ機ではリコーや、SCREEN GAから「解像度1200dpi、印刷速度150m/分、オフセットコート紙直接印刷」の実演が相次いだ。更に、各ブースでは多種多様なブック、販促資料、DM、トランザクション印刷など幅広い分野で後加工機と連動して、オンデマンドやバリアブル展開によるデジタル印刷の導入

メリットを紹介した。▼枚葉IJ機は、キヤノン、Xerox から出展され、ポスター、カードなどを印刷し注目を集めた。

▼トナーデジタル印刷機はキヤノン、リコーから枚葉機とXeikon、NIPSONから連帳機が実機実演された。主にブックの表紙、ポスター、厚紙、追刷りなどIJ印刷の難しい分野でトナー機の有効性が示された。

■多彩な「後加工機」の実用化進展

▼Hunkelerは10機を超す後加工機の新製品を実演、drupa2020を前にした同社の開発力やマーケティング展開が注目された。自社ブースでは「商業印刷用Generation8シリーズ」「全自動シートカットスタックライン」「DM用コンビライン」「高性能ブックプロダクション」「カット紙用レーザーテクノロジー」などを実演。また、他ベンダー向けインライン後加工機を開発し、リコー、キヤノン、HPのデジタル印刷機に接続してオープン化と自動化を紹介した。

▼後加工機の主要ベンダーは最新製品を出展。ホリゾンは「SmartBindingSystem、中綴じ製本ライン」、MÜLLER MARTINI は「無線綴じ、糸かがり製本ライン」、GUKは「医薬品能書用薄紙加工ライン」、FFGS と販売提携したHohnor は「少数部、ページ可変の小冊子加工システム」を実演した。

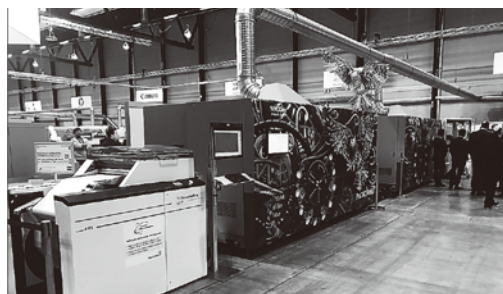
■関連製品の出展増加

今回の出展社100社のうち、メインのホール2にはHunkeler と大手デジタル印刷機、後加工機ベンダー16社が出展。ホール1には小型後加工機、デジタル加飾機、用紙、乾燥機、小型デジタル印刷機、インキ、RIP、ワークフロー、コンサルタント、業界誌などデジタル印刷を支えるベンダー84社が出展し、実機、パネル、ビデオ、パンフレットなどにより最新機器をアピールした。

【デジタル印刷機の出展状況】（順不同）

＜キヤノン＞ 連帳IJ機「Océ ProStream 1000」と枚葉IJ機「Océ VarioPrint i300」の2機種を出展した。Océ ProStream 1000は紙搬送と乾燥機を強化してオフセットコート紙に写真集、ブック、ポスターなどを高品質印刷し、ロール to ロールと新製品のHunkeler G8をインライン接続してスタック出力。また、Océ VarioPrint i300は新製品のHunkeler DocuTrim をインライン接続してカット、ミシン目を自動処理して、ポスターやカードなどのシートプロセッシングを実演し注目を集めた。枚葉トナー機imagePRESS C1000VPを出展し、ブック用の厚紙表紙やポスターなどを印刷。

＜リコー＞ 連帳IJ機は新製品のフルカラー「RICOH Pro VC70000」（写真）とモノクロ機RICOH Pro V20100の2機種を初出展し



話題となった。RICOH Pro VC70000は新インクや特許済みの新乾燥装置により複数のオフセットコート紙に150m／分で、旅行ガイド、カタログ、ブック、DMなどをフルカラー高品質でロール to ロールで印刷。RICOH Pro V20100は150m／分で印刷し、新製品のHunkeler「B2 フォーマットデリバリーライン」とインライン接続し、ブック、取説、医薬品説明書などを出力。

＜SCREEN GA＞ 連帳IJ機「TruepressJet 520HD+」の初出展と、同「TruepressJet 520NX」の2機種を出展した。TruepressJet 520HD+はSCインクと新乾燥装置を搭載し、

150m/分でオフセットコート紙にプレコートなしで「ブック、小冊子、カタログ」などを印刷し、ロール to ロールやロール to シート/スタックで出力。TruepressJet 520NXは5ヘッド目にインビジブルUVインクヘッドを搭載し、ロール to ロールでセキュリティ印刷を実演。

＜Xerox＞ 連帳IJ機「Trivor 2400HD Inkjet Press」とスタンドアローン型の連帳IJ機「Rialto 900 MP」と枚葉IJ機「Brenva HD」の3機種を出展した。自社ユーザーを含め、コンパクトなデジタル印刷機によるインクジェット印刷への移行を訴求。Trivor 2400HD Inkjet Pressは会期中の冊子「Daily」をHigh Fusionインクにより、オフセットコート紙に印刷し、IBIS 社製の製本機を使って出力し配布。Rialto 900 MPは高速化した新機種により、カタログ、ポスター、カード、小冊子をカットシートで出力。Bernva HD はカタログ、ポスターなどA4サイズを300 ページ/分で印刷出力。

＜HP＞ 連帳IJ機「PageWide WebPress T240HD」を出展し、150m/分で小冊子、ブック、ポストカードなどをロール to ロールで印刷。ブース内のHunkeler装置でロール to シート/スタック処理。なお、ロール交換にはHunkeler製の最新製品オートスプライサーRS8 とターレットリワインダーTR8 を使用して自動化を実現し、手動交換に比べ最高30%の生産性向上を紹介した。

＜コニカミノルタ＞ デンマークの会社と共同開発したオールインワンのデジタルラベル印刷機 AccurioLabel 190 を出展、多彩なラベル印刷を実演。UV枚葉IJ機「AccurioJet KM-1」の印字サンプル展示と高彩度トナーデジタル印刷機AccurioPressC83hcを技術紹介。

【後加工機の出展状況】 (順不同)

＜Hunkeler＞ 主催者として自社と他社のブースで10機を超す新製品を実機実演し、高い評価を得た。自社ブースに出展した主な

機器は次の通り。①全自動Hunkeler Generation8 シートカット＝2020 年リリース予定の商業印刷向け製品。A4を2列出し、A5を3列出ししてカット、スタックを15 秒で完全自動切り替え。スタック後、ホリゾンの製本機で無線綴じを実演。②Generation8 コンビライン＝ロール紙からカットおよび折り畳まれた最終製品まで、コート紙の4色印刷メーリングを作成。ロール給紙から動的パンチングユニット(紙面検査システム内蔵)により縦横ミシン加工を行い、ウェブホルダーで縦折りし、オーバーパスユニットでシート折り機へ移行。③超高速ブックプロダクション＝ページ数・フォーマット可変で、A5サイズ96ページのブックブロックを毎時3350冊まで実現する生産ライン。④Flyfolder オンデマンド出版用生産ライン＝全自動で毎時最高900冊のオンデマンド出版を実現。デジタル印刷機とのインライン処理速度を127m/分まで高速化。ページ数可変で1 冊ごとに可変クロスカットを実現。

＜ホリゾン＞ デジタル印刷向け書籍製本システム「Smart Binding System」と「中綴じ製本ライン」を実演。Smart Binding Systemでは各デジタル印刷ベンダーから持ち込まれた印刷済みロール紙をもとに各種製本処理を自動化。「中綴じ製本ライン」は、ロール処理に加え、Stitch Liner MARKⅢを中核にシートの中綴じ製本処理を紹介。ハイスピードオンラインフィーダによりオフセット印刷にも対応可能を紹介。

＜MÜLLER MARTINI＞ 無線綴じラインを出展し、「Vario パーフェクトバインダー」により無線綴じを行い、「infiniTrim 三方断裁機」でサイズと厚み可変の三方断裁処理を実演。「糸かがり製本ライン」ではソフトカバー付書籍、上製本用ブックブロックを生産。

＜Hohnor＞ RICOH Pro VC70000 で印刷されたルツェルン旅行ガイドブックを出展した小冊子加工システムにより出力。

わが職場

愛媛、南予においでんかなもし

愛媛新聞社 執行役員メディア推進局長 古田 恵一郎

西日本最高峰石鎚山(1982m)を頂点とする石鎚山系を源として、北に国領川、加茂川がそれぞれ新居浜平野、道前平野を堆積し、南に面河川が下りやがて仁淀川となって土佐湾に至る。四国三郎と渾名す吉野川(全長約194km)も瓶ヶ森を発して早明浦ダムを経由し、中央構造線に沿って東進し紀伊水道に注いでいる。

石鎚山系と北接する中央構造線は、西に伸びて細長い佐田岬半島(長さ約40km、最大幅約5km)を形成、先端から大分県佐賀関半島まで海を挟んで約13km。道後平野を潤す重信川は、石鎚山系と中央構造線を挟んだ北向かいの高縄山系から湧き出でる。道後平野中央の勝山(132m)に松山城、その北東約2kmの山麓に日本最古といわれる道後温泉があり、白鷺が足を癒やした話も有名だが、伊予風土記には、少彦名命(すくなひこなのみこと)が重い病から回復したという記述もあり、近くの湯神社に大国主命と共に祭られている。

その少彦名命は、肱川の瀬を渡ろうとして溺れて亡くなったとされており、大洲市内の少彦名神社に祭られている。肱川は、昨年7月の西日本豪雨の際氾濫し、西予市や大洲市に大水害をもたらした川である。少彦名神社には、「懸け造り」という工法で建てられた「参籠殿」があり、床の9割が崖にせり出している。高所恐怖症の方ご用心。

南予は他に、出石山(いずしやま812m)から眺める大洲盆地から溢れる霧、この霧が肱川を流れ下る肱川あらし、数寄屋造りの臥龍山荘(大洲市)、四国初のモール温泉みなと湯(八幡浜市)、司馬遼太郎が愛した宇和島、宇和島城は藤堂高虎の築城、国内有数のカツオ水揚げ港・深浦(愛南町)など、見所たくさん。愛媛、南予においでんかなもし。

第123回技術懇談会

福島民報印刷センターを見学

日本新聞製作技術懇話会は第123回技術懇談会として、福島民報社の新工場「福島民報印刷センター」の見学会を3月15日に実施した。会員社、事務局などから20名が参加した。

同センターは福島市の南に隣接する二本松市の小沢工業団地に立地し、2018年10月31日から本格稼働。建物は東日本大震災の経験を踏まえ免震構造とし、三菱重工機械システム製4×1輪転機3セットを備える最新鋭工場で、最大40頁、24カ面カラー印刷ができる。福島市内にあった工場を移転、新築したもので、延べ床面積は6,537平方メートル(約2,000坪)。倉庫



や廊下を少なくするよう工夫している。全体の敷地は団地の1区画「約8,000坪」という。福島民報社が印刷拠点を福島市以外に置くのは初めて。

この日は午前中に別刷り広告の印刷があるということで、一行は午前9時45分に福島駅に集合。バスには福島民報社の宍戸篤取締役印刷局長、我妻秀一印刷局総務兼印刷管理部長(いずれも当時)も同乗して、30分ほどでセ

ンターに到着した。

早速、宍戸取締役から工場の概要説明。

紙面は地元情報を充実させており、地方版は6版体制、損紙率が以前の工場より低くなってきたこと、紙面検査装置を初めて導入、オペレーターの習熟度は上がってきたこと、前日の別刷り印刷で非常用のディーゼル発電機を稼働させたこと——等々のお話を伺う。続いて、更地の状態から新工場が完成するまでをまとめた「民報社員の手作り」という映像を拝見した後、印刷フロアへ。

この日の印刷は地元百貨店の催し物特集。2頁約25万部を10万部/hほどのスピードで印刷している。メリハリのくっきりした両面カラーの紙面が刷り上がる。給紙フロアでは実際にAGVを動かし、ワンプ剥離装置、自動紙継仕度装置へと続くデモを見せていただい

た。210本収容可能な立体紙庫(70連対応)からインキ室、免震構造の基礎部分、発送場内と巡回して見学を終えた。

◇

福島民報印刷センターのある二本松市は「智恵子抄」で有名な詩人・高村光太郎の妻・智恵子の故郷。智恵子の生家が近いとお話を伺い、福島駅への帰途立ち寄ることに。付近まで行ったところ、バスが入ることのできる道はなく、見えたものは道案内の看板だけでした。とはいえ、天気の良い日で安達太良の山並みも遠望することができ、「ほんとの空」の下の見学会となりました。

今回の見学会は宍戸取締役、我妻総務に終始引率していただき、貴重なご意見を伺うことができました。厚く御礼申し上げます。

(事務局)

今回紹介するお店は静岡駅南口から徒歩圏内で、新幹線を途中下車してでも立ち寄る価値のあるお店です。

全国各地の海鮮丼をかなり食べ歩いてありますが、私の中では頭一つ抜けています。おすすめはランチの特選マグロ丼です。ネタとご飯を150円で増量できますので、騙(だま)されたと思って、恥ずかしがらず「特盛」を注文して下さい。

ランチ
特選
マグロ
丼・特
盛



美味
あつち
こつち

清水港 みなみ (静岡駅南口)

大トロ、赤身、備長マグロ、中落ち、漬けなど、さまざまなマグロがあふれるようにのっていて、味覚や食感を楽しむことができます。

ランチは人気店のためになんり行列ができてしまい、午前11時台でも小一時間は並ぶ時間的余裕の必要なのが営業の身としては辛いところです。

午後1時過ぎの訪問を推奨します。ただ



夜の
部
肴と
日本
酒

コダック 久米 邦雄

し、売り切れて食べられないこともあります。

また、夜の部も営業しており、美味しい料理をつまみながらお酒を楽しむこともできます。一人のお客さんも多いですので、是非立ち寄って頂ければと思います。

声をかけていただければ、必要に応じてお付き合いもします。

印刷工場におけるIoT・AI活用

第9回CONPT技術研究会

日本新聞製作技術懇話会は3月8日午前、第9回CONPT技術研究会をプレスセンター特別会議室で開催した。「印刷工場におけるIoT・AI活用——動向と事例」をテーマに、講師は東芝デジタルソリューションズ(株)デジタルトランスフォーメーション推進部の木村和生氏にお願いした。聴講者は新聞社関係31人、CONPT会員社など33人の計64人にのぼった。

講演は①IoTとは何か ②ものづくりIoT ③IoT・AI事例 ④印刷工場変革へ——という構成で進められた。その概略は以下の通り。

21世紀はイノベーションにデータを活用する時代だが、この点について、日本は出遅れている。

IoT (Internet of Things)とは自動車や家電、工場設備などさまざまなモノをネットワークにつなぎ、収集したデータを解析することで、新しい価値を生み出す仕組み。この進展の背景には「センサー」「通信」「ストレージ」という3つの要素のコスト低下がある。

IoT の構成は「可視化・分析」「プラットフォーム：データ収集・デバイス管理など」「通信：WAN・LANなど」「デバイス・製品・センサー」と、これらITシステムおよび制御システム全体のセキュリティ確保からなる。

中長期的な思考に加え、エンドユーザーにとってうれしいことを考えるのが、『IoT のお作法』だ。これまでに成功した代表的な例としては、建設機械の稼働情報を収集して自社および顧客にメリットをもたらすシステムが知られている。

IoTはさまざまなデータの組み合わせに価値を見いだすもので、大事なことは、現場との密接な連携だ。それを「共創」という。「やってみないとわからない」、「現実には単純では



ない」という前提にたって「筋のよい仮説とその検証」を積み重ねていくことが肝要である。

IoT の活用による製造業の進化を段階づけると、フェーズ1は「見える化・監視」。何が起きているのか、問題点はあるか——ここでは機械の稼働状態を精緻に監視、見える化する。フェーズ2は「最適化」。これによって予防保全や運用効率の向上を実現。フェーズ3で「高度化」に至る。付加価値を向上させ、新サービス・新ビジネスモデルを生み出す段階だ。

印刷工場の場合に当てはめると、稼働状況をリアルタイムで監視、分析することによって、生産管理の面では異常事態の早期把握、省エネによるコスト削減などの効果が想定される。

設備保全の面では保守時期の適正化・予防保全や交換部品在庫の適正化が可能となり、不良原因の特定などによる品質向上、ヒヤリハット撲滅など職場の安全確保にも貢献できる。今後予想される人財難の面から言えば、これまで「匠の技」とされてきたものもIoTとAI を活用することで、伝承していくことが可能となる。

(事務局)

技術対話の活動報告と意見交換

CONPT技術対話部会は3月6日夕、これまでに実施した新聞各社との対話活動の報告と今後の方針についての意見交換会をプレスセンター特別会議室で開催した。CONPT会員社10社16人が参加した。

冒頭、林克美部会長が、2016年9月の九州から昨年8月の中日新聞社との対話会まで、計7回の活動の概略を報告。議論の中から浮かび上がった「未来の新聞製作技術」の要件として、①コストダウンの面で「効率化」：生産性向上を実現する効率化から人財難に対応する効率化へ ②収益の維持向上の面で「多様化」：無読者・若年層に欲しいと思わせる製

品を提供するため、多様化に対応可能な設備・システム——をキーワードとして紹介した。

今後の活動については、改元、統一地方選、参院選などのイベントが一段落する9月以降に対話会を実現する方向で準備を進めていくことを報告した。

意見交換は、「対話のプロセスが大事。その中からヒントをつかむことが大事」の発言からスタート。「紙の新聞と電子メディア」「販売店・宅配の課題」などについて新聞社の考えを知りたいとして意見が交わされた。また、「これからは新聞製作部門以外の方のお話も聞いてみたい」との発言も出された。

(事務局)

会員消息

■担当者変更

* (株)加貫ローラ製作所(4月1日付)

[新] 山根 豊氏(営業4課課長)

[旧] 宮本 嘉之氏

* サカタインクス(株)(4月1日付)

[新] 中村 正剛氏

(印刷ソリューション部マネージャー)

[旧] 黒崎 彰夫氏

* 富士通(株)(4月1日付)

[新] 遠藤 徹氏

(社会システム営業本部メディア営業
統括部シニアマネージャー)

[旧] 前田 正樹氏

* (株)K K S(5月20日付)

[新] 神辺 光弥氏(営業部東京営業所長)

[旧] 木村 和憲氏

* ストラパック(株)(5月20日付)

[新] 飯山 雅志氏

(システム営業本部システム2部関東
2課課長)

[旧] 手打 省一氏

CONPT 日誌

3月6日(水)技術対話活動報告会-意見交換会(於日本プレスセンター・特別会議室、10社16名参加)

8日(金)第9回CONPT技術研究会
(於日本プレスセンター特別会議室、64名参加)

15日(金)第123回技術懇談会
～福島民報印刷センター見学会～
(20名参加)

18日(月) JANPS意見交換会並びに懇親会(於日本記者クラブ・会見場、42名参加)

4月4日(木)クラブ委員会(出席12名)

9日(火)広報委員会(出席5名)

15日(月)技術対話部会(出席6名)
企画委員会(出席10名)

18日(木)評議員会(出席8名)

■新着資料

* 新聞協会“新聞技術” No.246～247

“新聞年鑑2019”、“日本の新聞2019”